

マレーシア人大学生のジェンダーをめぐる性格と役割についての意識の分析 ——フォーカス・グループとマインマップを活用して——

近畿大学 安達智史

1 目的

本報告は、マレーシア人（マレー系、中国系、その他）大学生が、ジェンダーをめぐる性格と役割をどのように関係づけているのかについて分析することを目的としている。経済成長にともなう近・現代化を実現しつつあるマレーシアは、既存のジェンダー役割をめぐる大きな過渡期にある。女性の高学歴化が進み、それにとまない就労する女性の割合が増えている。だが他方で、長年、国家全体として推し進められてきた近代化政策にもかかわらず、伝統的なジェンダー規範が強固に存続し、依然として高い男女間の就労割合のギャップが存在している。後者は部分的には、近代化の副産物として展開されたイスラーム化を背景としている。では、実際に、マレーシア人、とりわけ情報化にともなう文化変容を経験し、ジェンダー間の教育格差の逆転が生じている若者世代は、男女をめぐる性格や役割の差異をどのようにとらえているのだろうか。

2 方法

本報告のデータは、2018年10月から2019年1月にかけて、マレーシアの国立A、B、C大学の大学（院）生に対しておこなわれた、20グループ（80名）に対するフォーカス・グループ・インタビューに基づいている。フォーカス・グループでは、男女の性格および役割についてディスカッションをおこなってもらった。その後、マインドマップを活用し、議論された男女に固有の性格や役割について分析し、両者がとどのように関係づけられるのかを検討した。

3 結果

分析の結果、次の点が明らかとなった。第一に、ジェンダーに基づく性格をめぐる考え方は、エスニシティ・性別を超え、ある程度共通すること（ex. 感情的／合理的、多様な関心／焦点化された関心）。第二に、感情性や身体性に基づく役割分業について認める傾向にあること（ex. 子どもと関わる仕事／3Dワーク）。第三に、マレー系は、あらゆる領域で女性／男性の役割の違いを強調する傾向にあり、それをイスラームの観点から説明していること。第四に、中国系は、家庭内における役割分業を（ある程度）認める一方で、学校や社会における性的役割分業のあり方に否定的な傾向にあること（ex. 男性は学級委員長、女性は副学級委員長）。第五に、マレー系女性は男性よりも、性的役割に肯定的／受容的であること（ex. 男性の上司を好む、女性の感情をめぐる特性）、である。

4 結論

分析結果を踏まえ、次のように結論づけられる。第一に、マレーシア人女性の家庭内役割の受容は、構造化された強固なジェンダー意識によって支えられている。第二に、マレー系女性は、家庭役割の重視と社会内でのフォロワーとしての役割を受容することで、高まる労働力役割への期待に応答しようとしている可能性がある。第三に、中国系やその他は、ジェンダー役割についての宗教的規制が比較的少ないことから、「セカンド・シフト（＝仕事をしつつ、家事労働を全面的に担うこと）」に陥りやすいが、家庭内役割の平等を求めることでそれに対応するかもしれない。第四に、男性は、女性よりもリベラルな意見を表明する傾向にあり、それが実践につながるのであれば、女性の家事負担は今後軽減されるかもしれない。以上から、マレーシア人のジェンダー役割はよりフラットなものへと向かいつつあるが、マレー系の間では、そうした変化はより緩慢であることが予測される。